

八郎潟を埋め立てた大潟村の大規模農場は・・・

教科書で、日本の湖の大きさランキングで琵琶湖に次いで第2位と記されていた「八郎潟」が今は、干拓計画によって18番目の面積の「八郎潟残存湖」を残すだけになっています。教科書の中の「アメリカ式の大規模機械を使用した大規模農業」という文字が記憶に残っています。

八郎潟干拓の歴史

1957年 戦後、食糧増産を目的として干拓工事の着工

1964年 大潟村発足

1967年 入植開始

1977年 工事竣工

* 米の量産を目指したが、減反政策によって失敗した計画とも見解もある。

* 環境的には、湿地の喪失



大潟村：山手線がすっぽり入る広さ

秋田市

男鹿半島



戻る場所の無くなった八郎は、今はどこにいるのかなあ。(日本むかし話)

大潟村では、「環境保全型農業に関する」アンケートの実施や(賛成約8割)、女性たちがせっけん作り運動などに取り組んできたそうです。稲作付面積(約八千ha)の六割以上で減農薬無化学肥料栽培を、すでに実践していた2001年に、大潟村に農家や大学の研究者らが集まって**環境保全型農業・生活を実践する宣言集会**が開かれました。



大潟村に住んでいる鳥や虫、魚、植物なども登場し、大潟村の農業を楽しく紹介している「大潟村のもうひとつの世界」です。2007年10月から毎月続いています。

大潟村では、環境保全農業の結果、魚や虫が育ち、それを食べる鳥も生息している様子がNHKでも取り上げられました。鳥は、215種が観測され、豊かな自然が育っているそうです。



8月19日には、大潟村の第4次入植者の坂本さんからお話を伺い、大潟村を案内していただきました。

1969年11月：入植訓練所に入所（2月に開田抑制政）
1970年10月：入植訓練所を卒業
1971年～：営農開始
1975～1978年：青刈り騒動（1978年：2000ha 青刈り）



入植者の現実を語られる坂本さん

入植者は、書類審査、筆記試験、面接試験で審査され、1年間入植訓練所に入所します。
入所訓練所では、講義・実験・実習などで40単位、さらに試験やレポートも課せられます。その中には、大型農業機械、作付けの実習もありました。

1966年～1974年までの第5次まで、580人が入植しました。

大潟村問題の根源

1969年の開田抑制政策により、当初予定の15haの作付けができず、米作はが8.6haに減反され、過剰作付け分をヤミ米騒動に発展していったそうです。

入所当時の三角屋根の家



坂本さんのご自宅の前で



増築されたり、立て直されたりした豪邸が並んでいます



大型農耕機械とその倉庫



農業水路



碁盤の目に整理された道路と田



水門の前で説明を聞く



食料の海外依存率の高い日本、未来の日本の農業に希望を持ちたいです。
でも、チョウヒに会えなかったのは、残念でした。